

平成三十一年度

人文学部

推薦入試

小論文

注意事項

- 一 試験開始の合図があるまで、この表紙を開かないこと。
- 二 試験問題は二枚、解答用紙は二枚、下書き用紙は二枚である。
試験開始の合図があつてから確認すること。
なお、試験問題に文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあつた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 三 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を算用数字で記入すること。
氏名を書いてはいけない。
- 四 解答はすべて解答用紙に記入すること。指定された解答用紙以外に記入した解答は、評価（採点）の対象としない。
- 五 配布された試験問題および下書き用紙は、試験終了後、持ち帰ること。

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

アキレスけんを断裂して先月末から入院している。外の世界から隔絶された病室で、ギプスで固めた不自由な足をベッドに投げ出しながら考えたのは、リアルな情報についてだった。

病院の売店の親切な女性とすっかり顔なじみになった。車椅子で毎日、朝刊、夕刊を5紙ずつ買いに行く。最初のころは珍しがられた。「ボクは新聞を読むのが商売だから」。売店は数少ない無駄口をたたける場所だ。「申し訳ないわね。昔は病室に届けていたけど、購読する人が少なくなつてやめたのよ」。夕刊を買いに行くと、まだ朝刊が売れ残っている。

新聞に目を通し、テレビをつけ、パソコンで世界の出来事をフォローする。世界で何が起きているか漏らすことはないし、ニュースを解説者が十人十色で意味づけをしてくれる。韓国と北朝鮮の南北首脳会談、米中貿易戦争、自民党総裁選……。

しかし情報を長年扱ってきたジャーナリストとして、入院してから違和感がぬぐえない。清潔で静かな病室で幾ら情報を得てもリアル感がないのだ。情報は無機質な記号のように通り過ぎていくだけで、自分の中に意味あるものとして定着しない。腑に落ちないという感覚だ。

この違和感は、社会と隔絶されたところでは情報は生きない、という仮説を私に考えさせた。執筆をなりわいとする立場で言うと、多様で関連のない情報が、相互に有機的に結びついた時に、新しい発想や視点が生まれる。それが可能になるのは「手触り感」のある社会と接していてこそではないかと感じている。またこの時、無機質な情報はリアルなものとなる。

仕事をし、人と食事をとり、冗談を交わし、街を歩き、映画や舞台を見るといった日常の中で、ふとしたことで内に蓄積した情報が活性化し、リアルなものとして立ち上がる。美術館で絵を見ていると、関係ない面白いアイデアを思いつくのも同じことだろう。

7月、豪雨が襲った岡山県倉敷市や愛媛県西予市などではダムの緊急放流で死者を出した。助けられた住民が「家の中にいて警報は聞いたけど、こんなになるとは思わなかった」と語っていた。もし近所の人と顔を合わせ、言葉を交わしていたら、もっと違っていたのではないか。人は幾ら情報があつても、リアルでなければ反応できないのだ。

情報化社会である。しかし情報を有効に活用、利用できなければ意味がない。さもなければ情報の密林に迷い込むだけだ。

(西川恵「病室で考えたこと」毎日新聞 二〇一八年九月二十一日)

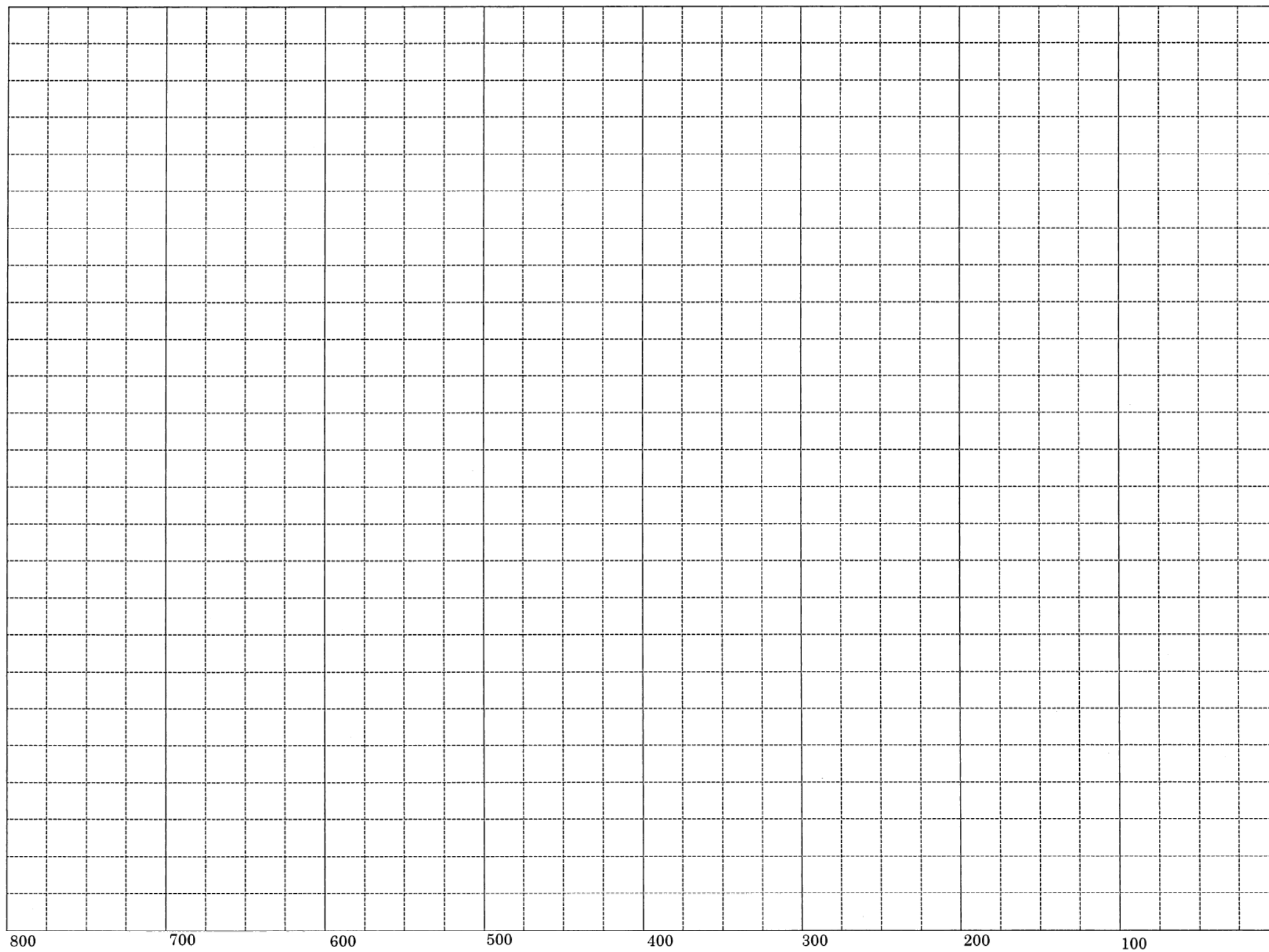
問一 筆者は傍線部で情報を無機質な記号にとらえています。それはどのような意味ですか。一五〇字程度で説明しなさい。

問二 筆者の主張に対して、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。

800 700 600 500 400 300 200 100

受	験	番	号

下書き用紙（解答用紙ではありません）



下書き用紙（解答用紙ではありません）

